

二〇二四年度

一般入試Ⅰ 入学試験問題

国語（五十分）（全十四ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはつきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 次の各文の太線の漢字の読みがなを書け。

- (1) 閑静な住宅街を散歩する。
- (2) どんな悩みにも真摯に向き合う。
- (3) 巧みな演技を披露する。
- (4) このデザインは汎用性が高い。
- (5) 研究が軌道に乗った。

二 次の各文の太線のカタカナの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 彼女はセイレン潔白な人だ。
- (2) この本の内容はチュウショウ的で分かりづらい。
- (3) 約束を忘れないように、スケジュール帳にヒカえておく。
- (4) 英語の文章を日本語にホンヤクする。
- (5) 喉がカワいたので、水を飲んだ。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

玄武書房辞書編集部勤務の馬締光也まじめは、前任者の荒木公平と言語学者の松本先生とともに、新しい辞書『大渡海』を完成させるために尽力した。十五年の歳月が流れ、ようやく『大渡海』は印刷の日を迎えた。印刷に立ち会った岸辺、佐々木、宮本らも感無量の様子であった。

①どんなに少しづつでも進みつづければ、いつかは光が見える。玄奘げんじょう三蔵さんぞうがはるばる天竺てんじくまで旅をし、持ち帰った大部たいぶの経典を中国語訳するという偉業を成し遂げたように。禅海和尚ぜんかいおしょうがごつごつと岩を掘り抜き、三十年かけて断崖にトンネルを通したように。辞書もまた、言葉の集積した書物であるという意味だけでなく、長年にわたる不屈の精神のみが真の希望をもたらすと体現する書物であるがゆえに、ひとの叡智の結晶と呼ばれるにふさわしい。

ついに印刷所の輪転機が稼働し、『大渡海』のページが刷りだされた。荒木、岸辺とともに最初の印刷に立ち会っていた馬締は、刷りあがったばかりのページをうやうやしく両手ですくいあげた。

それはまだ裁断されていない、巨大な一枚の薄い紙だった。ページの順序や上下左右はばらばらに、片面に十六ページずつ、両面あわせて三十二ページが印刷されている。

この巨大な紙を四回、半分に折ると、ページ順に上下左右もそろった形で、

一ページ大の紙が十六枚重なる。背の部分を残して三方を裁断したものが、「一折り」だ。つまり、三十二ページで一折り。『大渡海』は二千九百数十ページに及ぶ辞書となるので、九十以上の折りを重ね、束ねて一冊の本として製本する勘定だ。

裁断まえの大きな一枚紙は、ほのかな熱を宿していた。印刷機を通ってきたためだと理性ではわかっていたが、馬締はそれを荒木や松本先生の、岸辺や佐々木や自分の、『大渡海』にかかわった多くの学者や学生アルバイトの、製紙会社や印刷所の人々の、情熱が凝縮した熱だと信じた。

②目にやわらかな黄味を帯びた紙は、夏の夜のごとき闇色の文字をくつきりと浮かびあがらせる。ちょうど「明かり」の項が含まれるページだと気づき、馬締は急いでまばたきした。こみあげるもので視界が曇りそうになったからだ。

「あかり【明かり】」という言葉には、光や灯火ともしびだけでなく、証の意味もある。玄武書房辞書編集部が、十五年にわたる言葉との格闘は決して無為ではなかったと、いまこうして形となって証されたのだった。

「なんてきれいなんでしょう」

岸辺は宝石を見るようにページを眺め、ハンカチで目頭を押さえた。その隣では、やはり立ち会いをしていたあけぼの製紙の宮本が、感極まった様子でうなずいている。荒木がおそろおそろといったように、震える指先でページに触れるのがおかしかった。

「まじめ君」

夢ではないと確信できたのか、荒木は言った。「これをすぐに」

「はい。松本先生にお届けしましょう」

編集部では、「や行」以降の五校チェックが未だつづいている。そちらは岸辺に任せることにし、馬締は筒状に丸めた一枚紙を手に、荒木とともに築地にある病院へと急いだ。

(中略)

「実は、まっさきに先生のお目にかけていたものがありました」

馬締は紙を広げ、先生の膝のうえに載せた。

「おお」

松本先生はうめいた。いや、それは絞りだすような、心底からの歓喜の声だった。

「ついに、ついに『大渡海』がこうして……」

先生の細い指が、いくつしむように一文字一文字をたどった。そうです、とうとう印刷されて我々のまえに現れたのです。馬締はふいに、そうやって先生の手を強く握りたくなった。もちろん、不躰ぶしつぽかと思ひ実行には移さなかつた。

「先生。『大渡海』は予定どおり三月刊行です」

荒木が穏やかな口調で言った。「見本ができたなら、すぐにお持ちします。いえ、そのときには編集部で一緒にお祝いをしましょう」

「楽しみですな」

③松本先生は顔を上げ、うつくしい蝶をつかまえた少年のように微笑ん

だ。「荒木君、まじめさん、本当にどうもありがとう」

松本先生は『大渡海』の完成を待つことなく、二月の半ばに亡くなった。

(中略)

挨拶まわりも一段落し、馬締は祭壇のまえまで歩いていった。松本先生の奥さんが、愛おしそうに『大渡海』を手にとって眺めていた。

「松本は最初に入院したときから、覚悟はしていたようです」

隣に立った馬締に、奥さんは静かに言った。「もちろん、諦めるようなひとでは決してありませんでした。うわごとも最期まで、『大渡海』のことばかり」

「先生に『大渡海』をお見せすることがかなわず、本当に申し訳ありません」

馬締は頭を下げた。奥さんは「まあ、そんな」と首を振る。

「松本は喜んでいると思います。私もうれしい。あのひとのすべてが詰まった『大渡海』を、こうして形にしていたのですから」

奥さんは松本先生の遺影の隣に、『大渡海』をそっと戻した。会釈して祭壇を離れていく奥さんを見送り、馬締は遺影に向かって黙って手を合わせる。

「おつかれさま」

先生に言われたのかと、驚いて顔を上げた。いつのまにか、荒木がかたわらに立っていた。

荒木さんも老けたなと思った。それもあたりまえだ。一冊の辞書を編むあいだに、気がつけば十五年が経っていたのだから。

悲しみにうちひしがれる馬締に荒木が近づき、背広の内ポケットから白い封筒を取り出し、馬締に差し出した。それは松本先生が荒木に宛てた手紙だった。

最後の最後に監修者としての責任を果たせなかったことを、辞書編集部のみなさんにお詫びします。『大渡海』完成の暁には、わたしはもうこの世にはいないでしょう。しかし、いまは不安も後悔もありません。

『大渡海』が、言葉という宝をたたえた大海原をゆく姿がまざまざと見えるからです。

荒木君、ひとつだけ訂正します。わたしは以前、「きみのような編集者とは、もう二度と出会えない」と言いました。あれはまちがいだった。きみが連れてきてくれたまじめさんのおかげで、わたしは再び、辞書の道に邁進することができたのです。

きみとまじめさんのような編集者に出会えて、本当によかった。あなたたちのおかげで、わたしの生はこのうえなく充実したものとなりました。感謝という言葉以上の言葉がないか、あの世があるならあの世で用例採集するつもりです。

『大渡海』編纂の日々は、なんと楽しいものだったでしょう。みなさんの、『大渡海』の、末永く幸せな航海を祈ります。

馬締は丁寧に便箋を畳み、封筒へ戻した。

松本先生の遺影を、先生の名が刻印された『大渡海』を、会場に集う大勢

の人々の顔を、順繰りに眺める。

言葉はときとして無力だ。荒木や先生の奥さんがどんなに呼びかけても、先生の命をこの世につなぎとめることはできなかった。

けれど、と馬締は思う。④先生のすべてが失われたわけではない。言葉があるからこそ、一番大切なものが俺たちの心のなかに残った。

生命活動が終わっても、肉体が灰となっても。物理的な死を超えてなお、魂は生きつづけることがあるのだと証すもの――、先生の思い出が。

先生のたたずまい、先生の言動。それらを語りあい、記憶をわけあい伝えていくためには、絶対言葉が必要だ。

馬締はふと、触れたことがないはずの先生の手の感触を、己れの掌てのひらに感じた。先生と最後に会った日、病室でついに握ることができなかった、ひんやりと乾いてなめらかだったろう先生の手を。

死者とつながり、まだ生まれ来ぬものたちとつながるために、ひとは言葉を生みだした。

岸辺が宮本とケーキを食べている。編集部員は接待に徹し、会場では飲食をしないようにと言ったのに。楽しそうにお互いのケーキをフォークでつつきあっている。佐々木は壁際で白ワインの入ったグラスを傾け、西岡はあいかわらず軽薄な物腰で挨拶まわりを続行中である。

『大渡海』の完成を喜び、だれもが笑顔だ。

俺たちは舟を編んだ。太古から未来へと綿々とつながるひとの魂を乗せ、豊穡なる言葉の大海をゆく舟を。

「まじめ君。明日から早速、『大渡海』の改訂作業をはじめろぞ」

馬締を会場の中央へとうながしつつ、荒木が言った。その頬に、万感の思いがひとすじのきらめきとなって伝っていたように見えたが、気のせいかもしれない。

めでたい晩にも、『大渡海』のこのさきを考えている。⑤さすがは荒木さんだ。松本先生の魂の伴走者だ。

辞書の編纂に終わりはない。希望を乗せ、大海原をゆく舟の航路に果てはない。

馬締は笑つてうなずき、

「では、今夜ばかりはせいぜい飲むとしましょう」

泡があふれぬよう注意しながら、荒木のコップにビールをついだ。

(三浦しをん『舟を編む』より。なお、本文には省略等がある。)

問一 傍線①「どんなに少しづつでも進みつづければ、いつかは光が見える」とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 辞書を完成させるといふ大事業を成し遂げるためには、時間と労力と、言葉に対する繊細な感覚が必要だということ。

イ 忍耐力や根気が必要な辞書づくりは、みんなで力をあわせなければ、完成させることは難しいということ。

ウ 膨大な数の言葉が記されている辞書の編集も、不屈の精神で取り組めば、完成させることができるということ。

エ 言葉で埋め尽くされている辞書をつくるためには、一語一語の言葉の意味を丹念に調べ上げなければならないということ。

問二 傍線②「目にやわらかな黄味を帯びた紙は、馬締は急いでまばたきした」とあるが、『あかり【明かり】』の項が含まれるページはどのような意味を持つかを示した一文を本文中から探し、最初と最後の四字を記せ。

問三 傍線③「松本先生は顔を上げ、うつくしい蝶をつかまえた少年のように微笑んだ」とあるが、この表現から読み取れる先生の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア ひとの叡智の結晶と呼ばれるにふさわしい『大渡海』が、まもなく完成するという幸福をかみしめている。

イ 編集部が一丸となって完成させた『大渡海』の刊行を、皆でお祝いできる喜びを実感している。

ウ 膨大な言葉を集積した『大渡海』が、予想以上に早く仕上がりそうなことに興奮している。

エ 『大渡海』にかかわった多くの人々の情熱が凝縮した辞書の、完璧な仕上がり満足している。

問四 傍線④「先生のすべてが失われたわけではない」とあるが、馬締がこのように思った理由として最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 人は何かひとつのことに打ち込んでいけば、たとえ肉体が灰となっても、まっても、生き続けることができるから。

イ 生命活動が終わって、肉体が灰になってしまったとしても、先生の手の感触を今もしっかりと感ずることができたから。

ウ 先生の生命活動は終わり、物理的な死を迎えてしまったが、完成した『大渡海』を遺影に捧げることができたから。

エ 先生のたたずまいや言動を語り合い、記憶をわけあって伝えていく言葉があるかぎり、先生は心の中で生きているから。

問五 傍線⑤「さすがは荒木さんだ」とあるが、馬締がこのように思った理由として最も適切なのは、次のうちのどれか。

ア 死者とつながり、まだ生まれぬものたちとつながるために生み出された言葉の力を実感したから。

イ これからも太古から未来へとつながる人の魂を乗せて、豊穣なる言葉の大海を渡っていく覚悟を感じとったから。

ウ 太古から綿々とながっている人の魂を乗せた舟を編んでいくことが、松本先生に報いることだと痛感したから。

エ 『大渡海』編集の楽しい日々を思い起こすとともに、もっとすばらしい辞書を作ろうとする貪欲さに呆れたから。

四 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

コロナ禍とコスパ化の進む友人関係

二〇二〇年三月あたりから、日本社会でも新型コロナウイルス感染症が猛威を振るいだした。同じ年の四月には緊急事態宣言が発出され、社会活動はかなり制限されていった。その後も宣言は複数回出され、二〇二二年に入っても、事態は収束していない。

コロナ禍は、私たちが結びつなごりのあり方に、きわめて大きな影響をもたらした。人との接触や懇親は「不要不急」の範疇はんちゆうに入れられ、接触をなるべくひかえるよう要求された。政府の求める「新しい生活様式」では、人との距離をおいたり、マスクを着用したりと、とかく他者と深く接しないことを求められた。

コロナ禍、あるいは、コロナ後の人間関係を考えるにあたって重要なのは、つなごりが資源の色合いを強めているただなかにコロナ禍に襲われたということである。

「新しい生活様式」や「不要不急」が声高に叫ばれるとともに、①私たちは「人間関係の棚卸し」をいつせいに始めた。なかなか人と会えないなかで、それでも会うべき人はどのような人なのか、国民全員がいつせいに考え出した。その結果、直接会うに足る魅力のない人は、つなごりから排除されていった。まさに「接触の選別」とでも言うべき現象が、この二年半の間で引き起こされたのである。

飲みニケーションの受難

「接触の選別」が進んだことで、コストに見合ったパフォーマンスを発揮できないつきあいは、よりいつそう「無駄」と見なされる傾向が強まった。その典型のような調査結果が日本生命保険から提示されている。

②日本生命の調査は、二〇二二年一〇月にインターネット上で実施され、七七七四人の男女が回答している。注目を集めたのは、「職場の方との「飲みニケーション」は必要だと思いますか?」という質問に対する回答である。

この質問に「必要」と答えた人は一一・一%、「どちらかといえば必要」と答えた人は二七・一%おり、両者を合計しても三八・二%にとどまる。一方、「どちらかといえば不要」と答えた人は二五・〇%、「不要」と答えた人は三六・九%にまで上る。「どちらかといえば不要」と「不要」の合計は六一・九%である。

「どちらかといえば不要」と「不要」の合計が「必要」と「どちらかといえば必要」の合計を上回ったのは、調査が始まった二〇一七年以来、初めてのことである。さらに注目すべきは、「不要」と答えた人が突出して多いことだ。

この結果は、コロナ禍をつうじた人間関係の棚卸しの実情を示している。人と会うことじたいが「不要不急」の範疇に入れられ、誰もが直接会って話すべき人を吟味した結果、飲みニケーションは不要の範疇に入れられてしまった。コロナ禍で人と思うように会えなくなった時間は、人びとの孤独感を喚起し、人とのつなごりの重要性を再認識させてくれた。その一方、コロナ禍でつなごりの棚卸しに要した時間は、「今までとくに考えずつきあっていたけれ

ど、よくよく考えると無駄だと思えるようなつながり」を浮かび上がらせてしまったのである。

コロナ禍を経て、人びとが「会いたい」と思う人とだけ会う傾向は、ますます加速するはずだ。このような社会は、つながりの資源としての要素をいっそう際立たせ、つながりの格差をさらに広げてゆく。

会いたい人とだけ会うようになれば、多様な意見に触れる機会もますます減ってゆくだろう。人は想定しない出会いを経験するからこそ、多様な価値観や意見に触れることができるのである。人間関係の激変期を生きる私たちは、その点にもっと留意する必要がある。

(中略)

オンラインのさらなる浸透

コロナ禍が押し進めたもうひとつの現象が、オンライン化の浸透である。第三章でも指摘したように、今や日本国民の大多数が携帯電話またはスマートフォンをもっている。端末には連絡・通話用のソフトが実装され、安定的な電波網がそれを支えている。

このような環境のもと、多くの人が端末をとおしてソトの世界に常時接続し、いつでもどこでも連絡をとれる体制は、コロナ前には整っていた。実際に、日本国民の多くは、LINEをつうじて常日頃から連絡を取り合っている。

常時接続の環境が整っていたとはいえ、私たちの多くは、人と直接会って

話をすることをオンラインの通信よりも「よいもの」と見なしていた。コロナ前は、人と直接会わずに交流する環境は、技術的には整っていたものの、文化的にはまだまだ受け入れられていなかったのである。

しかし、コロナ禍は、オンラインにまつわる時計の針を一挙に進めてしまった。人との接触を「不要不急」と見なした「新しい生活様式」は、オンラインの交流を文化としても「許容しうるもの」として浸透させたのである。

人との接触が「不要不急」と見なされたコロナ禍において、日常生活は、オンラインの実効性を試す壮大な社会実験の場となった。二〇二〇年四月の最初の緊急事態宣言のもと、人びとは、対面で行ってきたさまざまな物事をオンラインに置き換えていった。

さまざまな物事をオンラインに置き換えたことで、人と直接会うことの価値が見直された向きもたしかにある。しかしながら、③オンラインの交流・通信が私たちの生活に浸透してゆく流れは止まらないだろう。

オンラインの利点・対面の利点

理由は簡単だ。オンラインは対面に比べはるかにわかりやすい利点をもっているからだ。オンラインの利点を尋ねられると、多くの人が、移動の手間が少ない、出張費用がかからない、遠隔地に住む・障害があるといった何らかの不利な条件を抱える人でも利用できる、好きな時間・場所で見られる・参加できる、といったことをあげるだろう。

一方、対面の利点はどうだろうか。なかなか思いつかないという人もいるだ

ろう。深い対話ができる、雑談ができるといった特性をあげる人もいるかもしれない。しかし、その点を証明するとなるとことのほか難しい。対面の利点はオンラインの利点に比べると、証明しづらいのである。

かりにあなたが管理職についているとしよう。あなたは、会議を対面で行ったほうがよいと考えている。一方、チームのメンバーはそう考えていない。むしろ、時間やコストの面からもオンラインのほうがよいと考えている。

こうしたときあなたは、チームのメンバーを説得できるだろうか。メンバーから「オンライン会議でも対面と遜色なくできます。むしろコストの面で優れています」と言われてしまうと言葉に窮するだろう。

長期的な影響はわからないものの、目先のコスト計算ならば確実にオンラインのほうに軍配が上がる。他方、対面の効果は曖昧だ。だからこそ、オンラインの交流・交信が私たちの生活に浸透してゆく流れは止まらないのである。

(中略)

加速する「接触の識別」

オンラインが文化として浸透したさいの注意点は二点ある。第一は「接触の選別」の加速化である。

人びとが対面の交流をオンラインに置き換えてゆけば、次は、どの部分に対面を残し、どの部分をオンライン化させるかという検討が始まってゆく。

合理的なコスト計算を行動軸とする営利企業では、すでに相当程度の検討がなされている。オンラインの交流・交信を導入すれば、移動時間や旅費

といった直感的にわかりやすいコストの削減効果を見込めるからだ。

大学も同様だ。二〇二二年現在、文部科学省は、オンライン授業による卒業単位の上限を六〇単位に定めている。この制限の撤廃を求める要求が出されている。初等教育、中等教育でもオンラインの導入は避けられまい。

オンラインの交信が浸透してゆけば、私たちは人と直接会うにあたり、会うに足るだけの理由を求められるようになる。その結果、直接会うに足るような魅力を備えている人だけ、対面接触のなかに残されてゆく。

それと同時に、私たちの交流は、ますます、目的・結果ベースでとらえられるようになる。会うに足る理由、すなわち会う目的を用意できない人は、交流の輪から撤退するしかないのだ。

人間関係のオンライン化が進んでゆけば、人づきあいには、合理的コスト計算の論理が否応なく浸透してゆく。一見すると便利な社会は、④コスト計算がびこる生きづらさの増す社会にもなりうるのである。

主流になる非対面の交信

第二は、非対面の交信の主流化とも言うものである。第三章で確認したように、人類は、長い歴史において、顔の見える人たちとの交信をもとに生活を営んできた。生活のほぼすべてが、顔の見える人たちとの交信で成り立ってきたと言っても過言ではない。

一九九〇年代に入ると、情報通信ツールの爆発的な普及により、かつてないほどの勢いで目の前にいない人との交流が生活のなかに入り込んでいった。

オンラインの交流が文化としても許容された現在、この傾向はますます加速してゆくだろう。

コロナ禍をつうじて、非対面の交信を確立するツールをつくった企業には、莫大な利益がもたらされることが明らかになった。ビデオ会議システム「Zoom」を提供するズーム・ビデオ・コミュニケーションズの日本法人では、二〇二二年一月期の売り上げが、二一年で約一〇倍になり一〇〇億円を超えた」（佐賀文宣・カントリーゼネラルマネージャー）という。

資本主義社会では、他社に先駆けて商品やサービスを開発し、世に送り出すことが肝要である。各国の政府がこぞって規制を敷かないかぎり、開発と販売の競争は続いてゆく。IT業界の巨人Facebookは、二〇二一年一〇月、仮想空間を表すメタバースにあやかり、社名をMeta Platforms（メタ・プラットフォームズ）に変更している。近い将来には、仮想空間で友だちと会うのが当然になる時代がくるかもしれない。

しかし、対面の効果がはつきりと見えていないまま、オンライン化に突き進むのは危険である。たしかにオンラインの利点はわかりやすく、対面の利点はわかりにくい。だからといってそれがオンライン化を進める理由にはならない。

そもそも、コスト計算のように、すべての物事を計算できるといふ発想は、もう少し見直されたほうがよい。現時点で計算しきれないところに、重要なものが隠れていることもあるのだ。そして、いったんオンラインに置き換わったものを取り戻すことはほぼ不可能である。

日常生活がオンラインに置き換えられた時点で、世界および人類は変わってしまったている。変わった社会を生きる私たちが、過去を懐かしんで再構成したものは、けつして「かつて」と同じものにはならない。ゆえに過去の再現は不可能なのである。

コロナ禍をつうじて進んでしまった時計の針を戻すのは難しいかもしれない。それならば、現状をもう少し精査するくらいまで、時計の針は止めておいたほうがよい。そのように考えるのは慎重に過ぎるだろうか。

（石田光規『友だち』から自由になる』より。なお、本文には省略等がある。）

問一 傍線①「私たちは『人間関係の棚卸し』をいっせいに始めた」とは、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア コロナ禍をきっかけに、自分たちの周りの人間関係を見つめ直し、今後もつながりを保つべき人と、そうではない人をより分けるようになったということ。

イ コロナ禍をきっかけに、自分たちの周りの人間関係において、関係を深める必要のある人の共通点を探し、今後の人間関係構築の土台にしたということ。

ウ コロナ禍をきっかけに、人間関係は周囲の承諾を得て初めて認められるものになり、周囲の承諾を得ていない関係は不要なものとして切り捨てたということ。

エ コロナ禍をきっかけに、「排除されるべき人間関係」に分類されるものを大胆に切り捨てたことで、個々の人間関係のつながりはより一層深まったということ。

問二 傍線②「日本生命の調査」とあるが、この調査の本文における役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 飲みニケーションを不要だとする人が際立って多いという事実を提示することで、「コロナ禍で不要なつきあいを無駄として切り捨てる傾向が強まった」という論の妥当性を強調している。

イ 飲みニケーションの調査結果を客観的に示すことで、「コストに見合ったパフォーマンスを発揮するために必要なことは何か」という新たな問題を考えさせ、論の展開を図っている。

ウ 飲みニケーションを必要だとする人が際立って少ないという事実を順序立てて説明し、「今後多様な価値観や意見に触れる機会はさらに減少していくだろう」という新たな主張へ導こうとしている。

エ 飲みニケーションを「不要」とする人が、「必要」とする人を初めて上回ったという調査結果を示し、「人間関係の棚卸し」は本当に必要だったのかという疑問を読者に投げかけている。

問三 傍線③「オンラインの交流・通信が私たちの生活に浸透してゆく流れは止まらないだろう」とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア オンラインに関する利点の研究はまだ始まったばかりで、対面と比較した場合の長期的な影響は、今後検討していく必要があるから。

イ 身に着ける端末に連絡・通話用のソフトが実装され、安定的な電波網のもと、世界に常時接続できる環境が技術的に整ったから。

ウ 社会実験を通して、対面よりもオンラインの方が、多様な意見や価値観に多く触れられるということが分かったから。

エ オンラインの利点は時間やコストなど客観的に証明しやすいものが多いから、対面の利点は証明しづらいものが多いから。

問四 傍線④「コスト計算がはびこる生きづらさの増す社会にもなりうる」とあるが、「生きづらさの増す社会」とはどのような社会か。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人と直接会うにあたって、費用対効果を考えるようになり、いつも自分の魅力を発信しなければ生き残れない社会。

イ コスト計算において、移動時間や旅費の計算で誤魔化ごまかしがきかなくなり、すべての行動が記録される社会。

ウ 人間関係においても会う目的や結果を考えるようになり、会うに足る理由がない人を交流の輪から除外する社会。

エ 曖昧だった対面接触の効果を証明し、誰もが反論できないデータとして提示する社会。

問五 国語の授業でこの文章を読んだ後、「オンライン化の浸透」というテーマ

まで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、ゝや。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

【五】 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

『おくのほそ道』最北端、平泉は第二部の最終地です。奥州藤原氏の都として栄え、源義経(一一五〇—八九)が最期を迎えた場所でもあります。まず前段。

三代Aの栄耀一睡の中に、大門Bの跡は一里こなたに有。
秀衡が跡は田野に成て、金鶏山のみ形を残す。先高館にのぼれば、北上川、南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が旧跡は、衣が関を隔て南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時Cの叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時Dのうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や 兵どもが夢の跡
卯の花に兼房みゆる白毛かな
曾良

芭蕉と曾良は義経主従が立て籠って討ち死にした高館に登りました。ここから見わたすと眼下を北上川が流れ、上流はるか北方の南部領へとつづいていきます。まよひこの旅の最北端の地らしい眺めです。二人は藤原一族や義経たちをしのび、「①笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ」、時の

たつのも忘れて涙を落したとあります。

忘れてならないのは、芭蕉と曾良は藤原氏や義経をしのびながら、同時に応仁の乱から百三十年もつづいた戦乱によって滅亡した古い日本をしのいでいるということ。義経は古い日本を代表する英雄です。清衡(一一〇五六?—一二二八)、基衡(一一〇六?—一一五七?)、秀衡(一一二二?—一一八七)の藤原三代は古い日本のある時期、みちのくで栄えた奥州藤原氏の当主たちです。

文中に登場する康衡(正しくは泰衡、一一五五—一一八九)は秀衡の子で最後の当主です。源頼朝(一一四七—九九)にそそのかされて義経を討ち、みずからは頼朝に討たれた人物です。

ここにたどり着くまで芭蕉と曾良はみちのくを旅して、古い日本の歌人たちがつくりあげた歌枕の廢墟をいくつも見てきました。その最終地である平泉の高館に立ったとき、二人の胸にあふれてきたのは壺の碑のくだりにあった「時移り、代変じて、其跡たしかならぬ」という思いと同じく、時というものは何もかも押し流してしまおうという無常迅速の嘆きだったはず。この平泉のくだりは『おくのほそ道』第二部、みちのく旅全体のまとめとして書かれています。このくだりは藤原氏や義経への鎮魂であるとともにみちのくの歌枕の廢墟と歌枕を生んだ古い日本への鎮魂でもあるのです。

本文を受けて夏草の句がおかれています。「兵ども」は直接は義経主従、次に藤原三代をさしていますが、②この句はそれだけに収まらない深々とした哀しみをそなえています。それは義経や藤原氏同様、無常迅速な時間に

押し流されたみちのくの歌枕の面影が句の背後にちらつくからです。

句の構造をみておくと、「夏草」はあたりに茂る現実の夏草の描写、「兵どもが夢の跡」は夏草を目にして生まれた芭蕉の心の世界、つまり「現実十心」の句です。この句もまた古池の句を発展させた句です。

隣りの曾良の句にある「兼房」は義経を守って、ここで討ち死にした老武者です。白い卯の花に白髪的面影を思い浮かべています。

つづいて後段では中尊寺の光堂（金色堂）が描かれます。

兼て耳 驚したる二堂開帳す。経堂は三将の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既顔廃③空虚の叢と成べきを、四面新に囲て、藁を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

前段とは文章の表情が変わっていることに注意してください。問題は「七宝散うせて」からです。光堂の内陣を飾っていた七種の宝は散り失せ、珠玉をちりばめた扉は風に破れ、金色の柱は霜や雪に朽ちはて、光堂自体もとうの昔に崩れ落ち、むなし草むらになっっているはずなのに、というのです。「空虚の叢と成べきを」は前段の高館のようにむなし草むらとなっていたはずなのに、という意味です。しかし光堂はそうならなかった。鞘堂でおおっ

て風雨をしのいでいるので今しばらくは千年の形見として残っている。

芭蕉は何をいおうとしているのか。この世界では無常迅速な時間によって何もかも押し流されてしまう運命にあるが、光堂がそれに耐えて残っていることに心を動かされているのです。平泉の前段が時間の激流に押し流されるものへの鎮魂であるなら、後段は生きながらえるもののかすかな光明を語っています。

④五月雨の句が描くのも同様の光堂の姿です。「降のこしてや」は降りつづく五月雨にも光堂だけは朽ちないでいるというのです。理屈をいえば鞘堂でおおわれているのでそうなるわけです。五月雨とありますが、無常迅速の時間が生んと降りしきっているかのようです。

（長谷川権「松尾芭蕉おくのほそ道」より。なお、本文には省略等がある。）
* 歌枕……古くから和歌に入れて詠まれることが多い名所。

問一 二重傍線AとDの「の」のうち、他と意味・用法の異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問二 傍線①「笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ」とあるが、この時の芭蕉の心情を説明したものととして最も適切なのは、次のうちどれか。

ア 過去に討たれた日本の英雄に対する追憶を通して、旅のまとめとして、過去の日本全体を懐かしんでいる。

イ 奥州藤原氏の都として繁栄した地を訪れて、その痕跡を発見し、藤原氏と義経のかつての栄光に感銘を受けている。

ウ 非業の死をとげた英雄を悼んでいたが、それだけではなく、滅亡にいたる背景にまで思いをはせて悲しんでいる。

エ 歌枕になっている場所を訪れたが、本来の美しさが失われた様を前にして、時間が元には戻らないことを嘆いている。

問三 傍線②「この句はそれだけに収まらない深々とした哀しみをそなえています」とあるが、それはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 『おくのほそ道』の本文で書かれていた内容とは異なり、ただ自然を描写するだけではなく、芭蕉の心の世界までもが表現されているから。

イ 『おくのほそ道』の本文で書かれていた内容と同じように、人の命のほかなさを強調することによって、日本らしい美しさに気付かせるから。

ウ 『おくのほそ道』の本文で書かれていた内容と同じように、目の前のものでだけではなく、廃墟となった歌枕に対する鎮魂の意を感じさせるから。

エ 『おくのほそ道』の本文で書かれていた内容とは異なり、歌枕を効果的に使うことによって、俳句の情景を読者の想像にゆだねているから。

問四 傍線③「空虚の叢と成べきを」とあるが、本文中においてこの箇所の特徴に相当する部分はどこか。抜き出して答えよ。

問五 傍線④「五月雨の句が描くのも同様の光堂の姿です」とあるが、「五月雨の句」で芭蕉がいたいことは何か。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 無常こそが美しいはずなのに、自然の流れに逆らって、少しも見た目が変わらない光堂のことを批判している。

イ 不変のものが無い世の中であっても、長い時間を経て、いまだに形を変えず残っている光堂に対して感動している。

ウ 神秘的な存在だと思っていたのに、朽ちていないのは、鞘堂のおかげにすぎなかった光堂に対して落胆している。

エ 今はまだきれいであっても、気候の特色から、これから朽ちていくことを感じさせる光堂のことを絶賛している。

